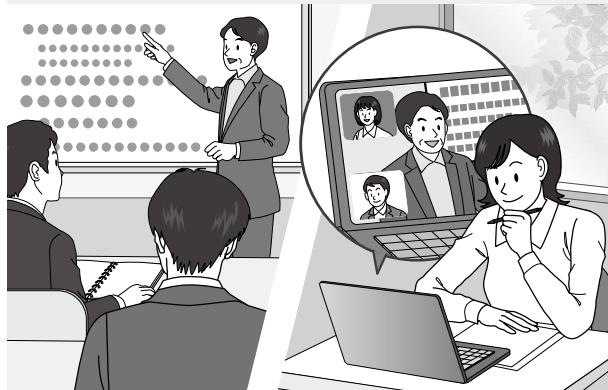


連載

# 進学塾に学ぶ ハイブリッド な教え方



第 11 回

## 【テストフォーミュレーション】 テストづくりの ワークショップ

市進ホールディングス  
コンサルティング事業研究所 所長  
**細谷幸裕**



ほそや ゆきひろ

1996 年、株式会社市進入社。現場を経て、2005 年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008 年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJT トレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

前回は、人材開発担当者と定期的に開催しているテストづくりの研究会「TF 研」についてお伝えしました。テストづくりの醍醐味は「作り手と解き手の可視化されないコミュニケーションが成立するとき」であるという知見は、今後の能力開発にも応用可能な発見となっています。今回は、そのテストづくりの手法を用いたワークショップについて解説します。

### テストづくりの可能性

私がテストフォーミュレーションを打ち出した背景には、コロナ禍で、とくに e-learning の内製化需要が高まるなかで、主に動画学習の最後に実施される確認テストに対するクオリティへの課題意識があります。配信プラットフォームの容量や LMS（学習管理システム）がどんなに高性能であっても、理解度を測る基盤のテスト設計がしっかりしていかなければ、成果はあまり期待できないと私は考えています。そうしたときに動画視聴後に行う確認テストにはどんな視点を盛り込めばよいか、どんな構成にすれば理解度が正確に測れるか、さらには、テストを学習者自身に作ってもらうことで、どうすればテストへのネガティブな概念を覆せるかという点を考えてはじめたのが、このテストフォーミュレーションの取り組みでした。

テストづくりにはさまざまな効果と可能性があります。今回は、主にオンライン研修や動画講義で学習した内容について、テストフォーミュレーションのワークショップにより定着促進を図るための方法についてお伝えします。

### ワークショップの進め方

ワークショップの実施環境としては、同じ研修や講義を受講した仲間を集めてグループごとに実施するのが効果的です。このとき、ライブであればオンライン・対面のどちらでも問題ありません。

#### Step1 問いづくり—個人ワークで問い合わせを書き出す

集まつたら、まずは受講者個々に学習した内容をテキストやメモをもとに思い出す時間を与えたうえで、個人ワークとして、講義内容に関する問い合わせを 10 個ほど書き出してもらいます。この問い合わせは、最初はな

なかなか苦労しますが、慣れてくるとそれまでは思いもしなかったような問い合わせてきて、楽しくなってきます。

問い合わせを生み出すポイントとしては、What（何が・何を）、Where（どこに・どこで）、Why（なぜ）、How（どのように・どうすれば）といった疑問詞を使って抽出することです。そうすると問い合わせが作りやすくなります。この段階でそれぞれの問い合わせに答え（解答）を用意する必要はありません。

### Step2 基準づくり—グループで問い合わせを整理する

個人ごとに問い合わせが10個程度あがったら、次はそれをグループ内で共有し、時系列、項目別、難度別、理解度別などの基準で整理をしていきます。最初は、講義内容を時系列で並べていくと理解の整理に役立ちます。これだけでもたくさんの問い合わせが多様な視点で共有されるため、そこから、学習理解が浅い点など個々で気づくようになります。

そして問い合わせづくりに慣れてきたら、徐々に難度別、理解度別（学習効果の高い問い合わせ）といった基準で整理していくと、その問い合わせを解かずとも学習に対する探究心が醸成されていきます。

### Step3 答えづくり—問い合わせをグループで解き合う

Step2で設定した基準で分類・整理できたら、それぞれのカテゴリーから解いてみたい問い合わせを3問程度抽出し、グループで解き合ってみます。そうすると、研修受講時には見逃していた項目の学習補完ができるたり、研修内容を超える深い探究ができるようになります。

このフェーズでは、たくさんの問い合わせを解くというよりも、学習内容の活用や根拠を検討するような問い合わせとともに、グループメンバーと協議し解説を作成することで、学習効果の高い展開になります。たとえば、新人マナー研修を動画学習した受講者が集まってグループ協議するときは、「どうすれば不安なく電話の取り次ぎができるようになるか？」や「報連相がますます必要となるシチュエーションはどこか？」などが、受講者が知りたいところになります。このような良質な問い合わせを活用しながらグループメンバーと解決を探る協議に持ち込むことで、学習効果の高い場が形成されていきます。

図表 ワークショップの展開例

<b>Step1 問いづくり</b>
e-learning等で学習後、学びの内容を問い合わせにする
<b>Step2 基準づくり</b>
グループ内で基準に合わせて共有・整理する
<b>Step3 答えづくり</b>
良質な問い合わせを抽出し、解説を検討・作成する
<b>Step4 学びだし</b>
全体で成果を共有し、理解度を測定する

### Step4 学びだし—全体でシェアする

良質な問い合わせによる解説がある程度進んだら、最後に、グループワークの成果発表の位置づけで、各グループから協議した問い合わせとその解説例をあげてもらいます。これにより、受講者同士の全体共有のほかに、ファシリテーターが受講者の学習理解度をある程度把握することもできます。このとき、実施側が想定したレベルに達していないグループや、問い合わせは立てられたものの答えが出せなかったグループが存在した場合は、ファシリテーターがその学習のゴールを問う発問を全体に投げかけ、各人で解答させる時間をとるのも方法です。

### テストフォーミュレーションの可能性

今回は、動画学習後の定着や応用を目的としたリアルタイムでのワークショップ例を紹介しました。テストフォーミュレーションは、ほかにもブレイフルかつクリエイティブな視点で問い合わせを作ることでの探究促進を目的とした学習効果が期待できます。また、作られた問い合わせを他者同士で解き合うことでの新たな発見を導き出す効果、さらには、問い合わせや解説を評価し合うことで自分の理解を客観的に見つめ直すメタ認知の効果など、多様な可能性を秘めています。

私はこのテストフォーミュレーションの取り組みを通じて、多くの人材開発担当者と企業内教育において「テストづくりのうねり」を生み出したいと思っています。

\*

次回は最終回、テストづくりの専門家の養成、テストフォーミュレーショントレーナーの視点についてお伝えします。